HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもの貧困、その背景に隠れたものとは ： 10 年の取材を通して
Author(s)	西田, 真季子
Citation	教育福祉研究, 23, 107-118
Issue Date	2019-02-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72520
Type	departmental bulletin paper
File Information	070-0919-6226-23.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

子どもの貧困、その背景に隠れたものとは
―10年の取材を通して―

西　田　真季子

◆子どもの貧困の取材を始めたきっかけ

最初に私がどういう人間なのかというところからお話したいと思います。私が子どもの貧困の取材を始めたのが、今から9年前ぐらい、2009年です。そこにはきっかけがあって、当時、旧民主党が政権をとって、高校授業料を無償化するということを掲げていました。高校授業料無償化というのは高校中退を防止することが目的です。多分今日いらっしゃってる方はみなさん、無償化になった後で高校時代を過ごされた方でしょう。

それで、高校授業料無償化について取材をしてこいと先輩に言われたのですが、私は「嫌です」と最初拒否しました。なぜ、私が嫌ですと言ったかは新聞記事でも何度か書きました。当時、自己責任論者だった私は、どうして中退してしまうようなやる気がない人のために、お金を出さなければいけないのかと考えていました。私がひとり親世帯で育って、自分は大学進学をしていたので、頑張ればできるはずだという気持ちが他の人より強くありました。また、高校中退理由について、文部科学省が理由を調査した時に、経済的な理由を挙げている人の割合は非常に少なくて、割合だけを見ると学業不適合だったり、学校に馴染めないだったり、そういう理由を挙げている人が多いです。そういう数字から見ても、「やる気がなくて辞めていくだけじゃないか」という思いがあって、どうしてそれを無償化しなければならないのかと。ただ、良い先輩に恵まれまして、3時間ぐらい先輩が私を説得してくれまして、私はしぶしぶ取材に行き、現場で色々なことに出会ったことで子どもの貧困の取材に入っていきました。

無償化の取材をするにあたり、子どもの貧困の実態を聞き、その直後くらいに埼玉県が始めた生活保護世帯への学習支援事業「アスポート」も取材しました。アスポートはどういう仕組みかというと、2010年から始まった埼玉県と民間団体と市町村の提携事業で生活保護世帯の中学3年生向けに無料で大学生のスタッフが勉強を教えます。この事業が非常に特徴的だったのは、生活保護世帯を担当しているケースワーカーが家庭訪問をして、そこでこういう教室がありますよと紹介することで、確実に貧困状態にある子どもと出会える。今、子ども食堂が全国にあると思うんですが、私が子ども食堂を取材したときによく聞いたのが「本当に必要としている子に届けたいのになかなか対象の子どもに会えない」という声でした。それが、行政と一緒に組むことによって、必要としている子どもに確実に出会える上、世帯に丸ごと関われるようになりました。

子どもの貧困ということと親の貧困は、どうしても切り分けがちなところがあるんですが、実際にはやはり親御さんの経済状態や精神疾患を抱えているとか、そういうしんどさがお子さんの学習意欲へ影響となっていることがすごく多い。ですので、やはりお母さんや世帯を支援していくこと、そこまで含めて支援と見ていたのがこの事業は画期的なところです。この事業の取材が、子どもの貧困とその支援について取材することになったかなり大きなきっかけになりました。

今では、生活保護世帯やひとり親世帯への子どもの学習支援について、生活困窮者自立支援法という法律に位置付けられて、全国あらゆるところで活動しています。もしかしたら、ここにいる皆

さんのなかで実際に子どもを教えているよという方もいらっしゃるかもしれないですね。マンツーマンに近い形で勉強を教えています。

◆子どもを支えていたもの ～学習支援の現場で～

話を戻すと、私が2010年に取材に行ったときに知ったのは、学習支援の場では勉強だけを教えているわけではないということでした。あるとき、学習支援教室に取材へ行った日は埼玉県立高校の入試の前日でした。ある女の子が「上履きがない、明日試験に履いてく上履きがない」という話をしていました。非常にボロボロでこんなのじゃ履いていけないと。それだけ聞くと「そんなの自分で買いに行けばいいじゃん」という話かもしれません。ですが、その子はお母さんと弟さんと3人で暮らしていて、お母さんは上履きを買いに行ってと言って行けるような状況ではなく、弟さんはすごく小さくて頼める状況ではなく、もう夜で今から開いているお店もあるのかという状況でした。

そこで教室のスタッフが今から開いているところ、ドン・キホーテとかを調べようよということになり、探して上履きを用意してあげました。そういうやり取りをしている時に、女の子の口から出たのは「もう明日、私、入試に行かなくてもいい」、「もう入試に行かない」という言葉でした。言葉のしっぽだけとらえるとエッという感じかもしれないですけれど、家庭がしんどい状況ではなくて、経済的にそんなに困っていない家を想像してみて下さい。入試の前日ってカツ丼を作って家族が「明日は受験だね」と励まし、お母さんはお守りを用意して、みたいなことになると思います。そういう同級生の姿は、彼女はもちろん分かっているわけで、それに比べてどうして自分は上履きもなくて、買ってくれるお母さんもいないのだろうと思う。彼女がそれまで散々、自分の家庭のしんどい状況とか、生活保護世帯で色々考えてきたことが、やっぱり心の中におりみたいに積み重なってきていて、上履きのことが最後の一つとして「入試に行かない」という言葉が出てきたと思うんですよね。

私も最初に自己責任論で「高校中退するような人はやる気がない」と思っていた時というのは、彼女が言った「高校受験なんかしない」と言ったところだけを捉えていました。「なんだ、そんなことで辞めるなんてやる気のない子だ」みたいに思っていたんですが、やはりその前段階、しんどい話を聞くことによってそれは最後のひと押しなんだということを知ることができました。ただ、最後のひと押しで高校入試を受けないとか高校を中退するとかは、非常に重大な結果をもたらします。その後、高校卒の学歴のないまま、安定した仕事になかなか就けない可能性もあります。けれども、そのきっかけはすごく小さなことだったりするんですよね。そこに多分アスポートの支援がなかったら、スタッフが一緒に上履きを探そうよということを言っていなかったら、彼女はそのまま試験を受けていなかったかもしれないと考えると、勉強だけを教えることじゃない支援ってすごく大切だということを現場で知ることができました。彼女は上履き問題も解決して、スタッフと一緒に次の日持っていく受験票だとかペンだとかそういう中身をカバンへ一緒に詰めながら入試に行く気満々で帰ったので、本当に良かったなとそういうことがありました。

あともう一人は、アスポートの支援で高校には入学したんですが、当時この事業は中学3年生までしかなくて（今は対象学年が広がっています）、高校に入学してから支援がなかったんですね。彼は高校に入学し、1年生で中退しました。やっぱり教室に通っている間は、上履きの子もそうですけれど、些細なことでも話を聞いてくれて支えになってくれる人がいて、勉強を見てもらってという大人がいたんですが、高校に入って全くそういう人が切れてしまった。そのなかで、自分一人で家庭のしんどい状況のなかで高校に通い続けるというのがどうしてもできなかったということで、彼は中退をしてしまいました。その後、高校生向け教室ができまして、彼はそこに通いながらもう

１回高校に再入学して、20歳までには高卒資格を取りたいということですごく頑張りました。今は就職もしているようで、そういう寄り添う大人の存在というのはとても大切だと知りました。

◆高校中退の真の理由は？

今ちょっと話に出てきた事柄を整理してみると、高校中退するとか高校に入る段階で学習への意欲が下がっているとか学力が下がっているというのは、すごく小さな頃からの積み重ねだと自分は取材の中で知り、記事の中で伝えたいなと思っていました。小学校低学年の頃に、生活保護世帯、ひとり親世帯、親が精神疾患をもっていたり、病気をもっていたりすると、宿題を見てあげたりとか勉強をするように声をかけたりとかするような機会が奪われてしまいます。日本のひとり親世帯のお母さんって、多くが働いていらっしゃるので忙しく、子どもと関わる時間が少なくなってしまう。

自分の幼少期をふり返ってみると、やっぱり宿題を見てもらってはいませんでした。専業主婦のお母さんだったり非常に経済的に裕福な家だったりすると、宿題見てあげたり声掛けとかって、多分普通に当たり前にされていることだと思います。小学生くらいの子どもに自分でやる気を出して宿題をやれと言っても、なかなか難しいところがあると思うので、大切なことなんじゃないかなと思っています。そういうことがないことにより、九九とか、小学校４年生ぐらいのところから分数とかも分からなくなってしまって、英語もアルファベットが書けないとなっていきます。

実際に埼玉県のある県立高校、いわゆる課題集中校と言われている、しんどい子たちが入ってきている学校の英語の授業を取材に行った時は、アルファベットの書き方を勉強していました。それは高校１年生で、教科書的にはあり得ないのですが、それをしないと学力的には子ども達のレベルと合わないからそれをしていて、「my name is」とか書いているんですが、もうすでにその綴りが違っている、そういう世界がありました。その子たちというのは、最初の段階でつまずいている。

そういうことを繰り返すことで、自分が何が分からないかも分からなくなり、勉強に全然ついていけなくなる。高学年になったり中学生になったりして座っているだけで、分からない授業をただ聞いているだけというのは、本当に苦痛。かつ成績も悪いので、自分は本当にダメ人間だみたいに自己肯定感も下がっていくことになり、もちろん勉強も嫌いになり、そういう苦痛に耐えながら中学時代からやってきたなかで、名前を書けばここは受かるといった高校に入ってみたものの、親からは「学校なんかに行くなら、辞めて働きなさい」みたいなことを言われる。今、授業料が無償化にはなっているんですけれども、定期代だったり部活のお金だったり制服代だったり修学旅行費だったりやっぱりかかるお金はあるもので、そういうお金を払うのも嫌だし、あなたがバイトをすれば生活費が入ってくるんだから働きなさいということを言われる。あと友達とケンカしたり、お金がないから友達とマックに行けないねみたいなことが積み重なるなかで、最後に辞めるという時に理由としては「高校生活や勉強にやる気が持てませんでした」となる。けれども、その短い言葉の背景にはこういう流れがあるということを分かっていただけたらいいなと思います。

◆子どもの貧困と切り離せない親の貧困

子どもの貧困という言葉は最近ワードとして社会でよく出ていますが、私はこういうお話をする時に必ず言っていることがあります。子どもの貧困は理由は本当に一つしかなくて、親世帯の貧困です。親世帯、大人の貧困には様々な事情があります。その人の生育歴だったり会社が倒産したりとか、色んな事情があるんですが、子どもの貧困だけは理由を探す必要がないです。親がなぜ貧困になるのかを考えると、よく言われる貧困の連鎖だったり、ひとり親世帯の家庭にあったりします。だったらどうして、親の貧困がメディアにあまり取り上げられていないかというと、子どもは自己責任論の枠の外にいるという認識がやっぱりあり

ます。

報道する方も受け取る方も、この子には何の罪もないのに貧困状態にあるのが可哀想だから、学習支援だったり子ども食堂だったりが必要なんじゃないかという議論になります。ただ、私はそれって解決になるのかなと考えます。流れで見ていただくと、やっぱり親の貧困・世帯の貧困とかを何とかしなければ全く意味がないんです。ですが、親の貧困の話になると、その人は本当にやる気があるのかとか、働いているのかとか、自己責任論の話を取り上げなければいけなくなるので、それがない子どもの貧困だけが取り上げられがちになっていると思います。

では、子どもの貧困は全て大変だと扱われるのかというと、そこも実は自己責任論の影響とは無縁ではありません。講義で聞かれたような相対的貧困と絶対的貧困の定義だったり、健康で文化的な最低限度の生活、生存権の問題だったり、事実関係はあるのですが、取材をしていて感じることはやっぱりそれと別の世間の目、空気、言葉でいうと自己責任論みたいなものに非常にさらされていると思っています。いくら、相対的貧困や生存権の話をしても、全く響かなかったり、逆にそれがバッシングになってしまうなかで、非常に悩みながら取材をしたり記事を書いているというのが私の今まで取材してきた現状です。

◆ひとり親世帯の記事に寄せられた声

それを具体的にお話できればなと思い、一つの記事を資料としてお配りしました。この記事が生まれた経緯として、当時、児童扶養手当というひとり親世帯に支給される手当の金額を上げそうだという流れがありました。そこで、ひとり親世帯の貧困は、そもそもどういう状況かとか児童扶養手当って何だろうということを記事で取り上げることにしました。

具体的に手当を受けている方にお会いして、お話を伺って記事を書きました。記事中に、「年収が360万円､実家に住んでいて家賃がかからない」という内容が出てきます。この金額を聞いて皆さんどういうふうに感じられますか？その前段に書いてあるんですけれども、お子さんは2人いらっしゃるということで、DVを受けて離婚されてひとり親で非正規の仕事をされている状況なんです。皆さんが一人暮らししているのとは、子どもの教育費がかかるので感覚が違うので、360万円をつかみづらいのもあるかもしれないですが、家賃がかからないならそんなに困ってないんじゃないという感覚をお持ちの方もいらっしゃるのかなと思います。

掲載後、読者からの投稿を載せているコーナーで、この記事を受けて実名で、確か20代か30代の主婦の方だったんですけれども､「これが貧困なんですか？」という趣旨の投稿がありました。投稿が載った時に私としては、非常にショックというか、取材に応じて下さった方が傷ついてしまうのではないかとすごく心配しました。そのフォローをしたい、どういう形だったらそれが書けるかを会社の中で話し合った結果、意見を募集する記事を出しました。最初は上司に「360万円は貧困だと思いますか？」と聞いてはどうかと言われたんですが、バッシングの意見が集まるのが非常に想像できたので、こういう意見を募集するという形にしました。

◆貧困の背景への想像力を

記事には書いていないんですが、このご家庭のお子さんには障害があります。それは個人に関わることなので、記事になればネットにも載りますし、書きたくないというのが取材の過程でありまして、自分は書きませんでした。そういう記事に出ていないところで女性が抱えている事情があって､それはこの女性だけじゃなくて､色んなメディアに登場する方達というのは、やっぱり全てお話できる訳ではない事情を抱えているのも理解いただけたらなと思います。ただ、それを知らない人にとってみれば、この金額で本当にやりくりできないの？みたいなところがあったりすると思います。

あとは、この方にお話を聞いているなかで、

「時々お惣菜を買って帰ることがあります」と言われました。それだけを聞くと、「なんでそんなことをしているんだ、高くつくから全部自炊してスーパーをはしごしろ」みたいな話があってもおかしくはないと思うんですが、そこは想像していただきたいところです。この女性が一人大黒柱の状態で、子ども２人を養っていて、なんとか社会人まで育て上げないといけないという状況です。そのなかで、女性が働いて体がくたくたになっているときに、節約のために無理して料理をすることで過労で倒れてしまったら、まさしく貧困の連鎖になってしまう。そしてさらに子どもが困ってしまう状況になる。それとを考えると、お惣菜を買うという選択はそんなに悪い選択なのかなと考えます。時間をお金で買う、そういうことにももちろん経費はかかってくることを考えると 360 万円というのが本当に高いんですか、低いんですかということはもうちょっと考えてほしいなと思います。ただ、惣菜うんぬんというのを最初に私が書かなかったのは安いスーパーをはしごすればいいじゃないというバッシングがくることを心配して書かなかったという事情があります。

結局色んなご意見をいただいて、新たな記事を載せたんですけど、いただいた主な意見をまとめて書きました。実はここに載せているのは選んでいるものです。ご意見は、こんなに沢山来るんだというぐらいいただいたんですけれども、「安いスーパーをチラシを見てはしごしろ」とか、「スーパーでタダで水がもらえる」とか、あと「野草のようなものを食べられる」とかいうものもありました。新聞は読者の年齢層が高いのもあり、そういう意見もいただいたんですけれども、そこもちょっと想像していただきたいです。安いスーパーをはしごできるのは実はお金がある人なんですよね。自分１人でギリギリで働いていて、他に家事もやってくれる人もいなくて、ひとり親で朝から晩まで働いている人がその限られた時間の中でチラシを見て、スーパーをはしごするという、コスパの悪いことができるかというと逆にできない。水をもらってくるのも、車があれば車に載せて帰ってくればいいんですが、車を持ってなければそれはどうやって持って帰って来るんですかという話になる。それで体を壊してしまったら困るということもあるので、表面的なことだけでは実際の判断はできないと私は思っています。

すごく印象的だったのが、意見をくださった方の中で、ひとり親世帯の当事者もお便りをくださいました。記事で３組、出ているんですけれど、親御さんないしはお子さんが当事者だった、お子さんが自殺したという方もいらっしゃいました。その自殺されたお子さんを持つ方や、母子世帯で育った男性がおっしゃっているんですけれども、今日表面的に食べるものがないとかではない、非常に色んなことの積み重ねで、自己肯定感を奪われるとか諦める癖がついてしまう。表面で暮らしていけるかどうかだけじゃない、暮らし・生活・人間というものが背景にあるんだということ、お金の金額だけじゃなくて人間の生活なんだというのを、貧困の議論をする時に知っていただけたらなと思っています。私も、記事を書く時はそういうことを伝えられたらなと思っています。沢山の当事者にお話を聞く機会がこれまであって、毎回、本当にこういう風にショックを受けたり傷ついたりしながら生きている人が沢山いらっしゃるんだなと胸を痛めながら取材をしています。

最初に投稿いただいた方もそうなんですけれども、何万円とかお金だけに反応するのではなくて、その人が生活をしていると想像していただきたいなと思っています。例えば「100 円均一で全部買える」という意見も、それって１カ月なら頑張ろうとすればできるかもしれないですけれども、それが１年間続く、あるいは精神疾患があっていつ終えるか分からない状況で１年、２年って続けられるんでしょうか。また、部活動とか友達と遊びに行くこともお金がかかる。友達がみんなで放課後これからマックでも行こうか、カラオケでも行こうか、みたいな話になった時にお金が無いから行けない、毎回断わらなきゃいけなければ、そこにしんどさがある。

また、生活保護世帯とかひとり親世帯の方とい

うのは、経済的なことや年収だけじゃない色んな事情が絡み合っていて、自分の生育歴だったりとか取り巻く実家の環境だったりとか、DV を受けたことによってフラッシュバックがあってなかなか仕事に行けないとか、お金だけでは見えない非常に複雑な事情を抱えています。今のお話したようなことを整理すると、経済的困難があった時に、そこから生まれること、もちろん衣食住の問題とか最低限のこともあるんですが、そこから低学力・低学歴の負のスパイラルになったり、そういうことの繰り返しで自己評価が低くなったり、そういうことによっていつも不安感や不信感を持っていることに繋がっていきます。

あと文化的資源の不足で、絵本の読み聞かせを子供の頃にしてもらったことが多いかそういうのがないのか。そういう不利が蓄積されることで、貧困状態になってその子どもが大人になって、その大人が子どもを育てるということによって次世代の子どもの貧困ということで連鎖していくこともあります。

◆子どもの貧困への支援

次は、私が取材の中で出会った支援をご紹介していきたいんですけれども、大阪市西成区の「こどもの里」というところがあって、映画で『さとにきたらええやん』という作品になって最近公開されました。見たことある方いらっしゃいますか。上映会とか時々やっているので、もし良かったら見ていただきたいんですけれども、そこは学童保育とか居場所、ファミリーホーム的なものとか、子どもに関するありとあらゆる支援をしているところです。遊び、日常を共にすることによって家族とも関わるし、どんな子供でも受け入れる。何でも丸ごと受けとめることをやっていました。ここは、地域でネットワークを作って、他の団体や公的機関、児童相談所などと連携しながら子どもを支えていけているところも良いところです。

あと、沖縄県南風原町、「はえばるまち」っていうんですけれど、ここに「子ども元気 ROOM」というところがあって、本当にしんどい層の子たちをかなり選んで支援対象にしています。そこは子どもたちに食事だったり学習だったり生活指導や親との信頼関係作りまで全部やりますよというところです。具体的には、夕方時間にその子たちに来てもらって、一緒にご飯を食べて、歯磨きしたり髪の毛洗ったりとかお風呂に入ったりそういうことまでやって、21 時半くらいから子どもを家庭まで送っていきます。何気ない動作の中に今までずっとお話してきた子どもを支えるための道具が散りばめられています。来てもらっている子たちというのは、親からのネグレクトの危険もあり、十分な美味しい食事が食べられてないこともありますので、ここの食事で補います。

学習も先ほどお話しように、宿題をやる習慣だとか九九が分からないとかがあるので、スタッフが一緒に宿題を親代わりにみます。あとは生活指導です。私も聞いてちょっとびっくりしたんですが、髪の毛の洗い方を知らない子がいる。普通は、だいたい髪の毛を濡らしてシャンプーをつけて洗うと思うんですが、いきなり髪にシャンプーをつける、わざとやっているとかではなくて知らない。親がそういうことを教えてくれないという子がいて、それも自然に生活を共にする中で分かっていきます。

あと、親との信頼関係作りという意味で、子どもを自宅に送っていく際に、親は玄関のドアを開けざるをえないのでそこで親御さんとちょこちょこ話をします。親御さんも最初はあまり知らない人と話したりもできないんですが、繰り返すことで親御さんとの信頼関係を作っていって、実は家庭ではこんなことを戸惑っていますよとか、子どもをどうして可愛がれないかというような話をちゃんと聞いていくそうです。先ほど親の貧困が子どもの貧困の理由という話をしましたが、その意味でも非常に総合的な支援ができているわけです。

取材を通じて私が感じるのは子どもの貧困の支援でいうと、子どもだけではなくて家族も支援するというのがとても大事だということです。子どもはまだ小学校とか中学校とかとつながっている

ので、注意深い先生がいれば見てくれるところもあるんですけれども、親とか世帯の貧困って、非常に見えづらい。SOS も出せなかったりします。どこどこに相談しに行けばよかったとか、どこどこに行けばこんなに支援があるのにどうしてこの人たち行かないのかしらとか、そういう思いがあるかもしれないんですけれど、そういうことに背景があります。

どういう支援機関に行けばいいとか、助けを求めるとか、そういう基本的なことが生育の中で身についてこなかった人ってすごく多いんです。信頼できる人や友人がいないので、SOS や相談もできないとか、何が必要かも分からないことがあります。なので、親とか世帯に、支援側から入っていくのは非常に重要だと思います。学習支援とか子ども食堂っていうのは、私の個人的な考えでは、あくまでも応急処置というか入口にすぎないです。世帯自体を支えることがなければ、毎日その子にご飯を出せますか、毎日その子の勉強を何年間も見てあげられますかということがあり、やはり親世帯の支援は欠かせないと私は思っています。

◆貧困女子高生バッシングについて

あと少しだけ時間があるので、これまでに書いた記事についてお話したいと思います。「貧困女子高生バッシング」っていう事柄自体をご存知の方ってどれくらいいらっしゃいますか？手を挙げていただきたいのですけど、あんまりそんな知られてはいなかったんですね。

NHK のニュースで女子高生が貧困について発言して、それを取っ掛かりに貧困を取りあげた、時間としては短いニュース番組の一つだったんですけれども、これがバッシングになりました。というのが、その女の子が会議で発言した場面のあとで、その子のご自宅に NHK のカメラが取材に行ってお部屋が映って、どういうお部屋でどういう生活をしているかが映っていました。その時に映っていたペンがちょっと高いイラスト用のペンで、ライブのチケットの半券も映っていて、それを見たツイッターやネット上の人たちが「こんなのがあるんだったら貧困じゃない」と言い出し、大炎上してしまいました。そのペンを特定して、１本いくらという話だったり、この○○のライブチケットはいくらだとか羅列していました。

先ほどお話をした 360 万円が貧困かどうかという議論にも近いんですけれど、これが買える子が貧困についておかしいということになりまして、特に深刻だったのがこの子の個人情報を特定する人が出てきたことです。テレビでは顔を出していただいてたんですけれども、名前は匿名、実名は出していなかったですし、学校名も出していなかったんです。けれども、個人情報や住所がさらされるという非常に重大な事態になり、当事者のお子さん自身を深く傷つける事態になりました。

同じ事象を、同じ毎日新聞の記事で取り上げたんですけれども、トーンの違う二つの記事を掲載しました。一つはネット上の炎上現象を取り上げていて、金額の話を中心的に書いていて、今私がお話してきたような子どもの貧困の背景には何があるんだろうかとか、そのペン１本いくらということだけで何が読み取れるのかという話はそこまでは書けていない状況です。そこに私は問題意識をもって、別の記事を書かせてもらいました。

私が貧困について取材を始めた 2009 年頃はちょうど生活保護バッシングが激しく吹き荒れていた時期と重なっていて、バッシングにはいつもすごく神経を使いながら記事を書いてきた９年でした。少しでもスキを見せると突かれるんじゃないかと、こちらも注意深くなっているところがあります。あるジャーナリストに聞いた話で、その方が生活保護世帯にテレビ取材へ行ったときに、すごくその人がおしゃれをして出迎えてくれたそうです。皆さんも考えたら分かると思うんですけれども、知らない人が家に来てくれる、その方はおばあさんだったんですけれども、最大限こぎれいにしてお迎えしなければ失礼だ、そういう思いって人間だったらあると思うんです。

ただその映像だけを切り取られたときに、この貧困女子高生バッシングと同じように、「そんな

服を持っているのに生活保護受けてるのっておかしくない」みたいなことになってしまうんじゃないって、すごく危惧したとおしゃっていました。そのジャーナリストは、そういう服を着ないでとは言いたくもないし言えないので、そのまま放送して、スタジオで自分がお話する時間で「実は彼女はこうやって一張羅で迎えてくれたんです。普段はこういうことじゃないです」といった補足を口頭でしたとおっしゃっていました。別なジャーナリストの方、それもテレビの方だったんですけれども、やっぱり似たようなことがあったとおっしゃっていたので、このNHKの放送が批判されるべき点は、この子がペンを持っている背景とかそういったことに言及できない、その時間がないとすると、そこは彼女にバッシングが向く可能性に想像力を働かせて彼女を守る方向にいくべきだったと思います。

毎日新聞の「記者の目」というコーナーは私は書いたんですけれども、逆に自分も反省の部分があって、批判されない当事者ばかりを伝えていって、みんな我慢している、そういうことばかり伝えることになっていなかっただろうか、そういう反省もあります。さじ加減というか、人間なので趣味もほしいし、毎日100円均一では暮らせないと自分の頭の中では理解している。けれども、それを記事にするときに当事者の人たちにとって暮らしやすい社会になるように記事を書いているのに、こういうバッシングが起きれば、かえって悪影響になるのではないかという恐れもあります。どこまでだったら正直に書くことによって、貧困という個々の理解を深めることができるのか。逆にバッシングを引き起こすことによって当事者を傷つけたり、運動を後退させてしまうことにならないのかという、そのさじ加減に非常に悩みながらいつもやっているのが自分の現状としてはあります。

ちなみに女子高生の話なんですけれど、ペンは人からもらったもの、そういう事情があると私は聞いています。そういうことも、誰にもらったとかどういうことがあったかは、みんなそれぞれ事情があるわけで、それを全部さらさなければいけないのでしょうか。メディア側としてそういう説明を尽くすのも大切にしなきゃいけないという反面、受け取る側としてもじゃあペンを持っていたらみんな貧乏ではない、そういう短絡的な発想にはならないでほしいなとは思っていて、そういうふうにならないような記事を伝えていきたいと思っています。

◆貧困は小さな積み重ねで起こる

もう一つ紹介をさせていただきます。「くらしナビ　ライルスタイル」（2016年4月29日掲載）というコーナーの記事に書かれている、「娘の除籍」突き付けた現実（上）というものです。毎日新聞には「女の気持ち」というコーナーがあって、人気のコーナーで沢山投稿いただくところです。そこへの投稿で、娘さんがお金がないということで大学を除籍になったというものがありました。

これが、記事になっていった経緯として、これは私が所属していた生活報道部が「女の気持ち」の編集もしていて、これが載ったのを見て、何とか除籍にならないようできるんじゃないかと私が職場で言っていたところ、じゃあ調べてみようかということになって、調べたんです。ですが、結論としてはこのお子さんの場合はどの条件からも外れていて、何も救済策というのがなかったんです。それはショックで、こういう枠組みから外れてしまうことがあると伝えることにしました。

「娘の除籍」突き付けた現実（上）に出てくる方は、大人世代、親世帯の貧困の非常に象徴的な例でもあります。ちょっとしたボタンの掛け違い、介護、夫との離婚とか、そういう一つ一つが単独で起きるとリカバリーできそうなことも、積み重なって起こることもある。積み重なって起こるかどうかまで先の人生は分からないと思うんですけれども、そういうたまたまの積み重ねでどんどん追い込まれていって、貧困になっていくのもすごく典型的な例かなと思っています。それが貧困の連鎖、娘さんが大学からいなくなってしまう。どういう人が貧困になっているんだろうと思う時

に、すごく特別な人とかすごく特別なことがあったということよりは実はこういう小さなことの積み重ねもあるんだよ、実際そういうことが連鎖していって、生計が厳しくなっていく方もいらっしゃるんだよということをお伝えしたいと思います。

◆質疑応答

司会（松本）：質疑応答にしたいと思います。

質問者 A：お話ありがとうございました。先程ちらっと出たお話で課題集中校というのがあったんですけども、2～3年くらい前にその記事を読んで関心を抱いていたんですけれども、西田さんが取材を通していくなかでそういった大学の在り方というか今後どういうふうなあり方が理想的なのかお話を聞かせてください。

西田：大学ですか。実際にさっきお話したのは高校で、私は大学の取材経験がないんですけれども、高校でも大丈夫ですか。

実際には、現場でアルファベットから教えるとかそういうことをやってくれる学校はまだ少なくて、そういうやり方はほしいと個人的には思っています。というのは、やっぱり高校卒業の資格を持たないというのは、その後の人生ですごく困難なことで、正社員になるということになると高卒以上かどうかは問われる。それがすぐに問題にならないのは、高校中退した若い時というのはコンビニのバイトとか何か仕事があって、実家に住んでいれば生活できない訳ではない。働いているし何も問題ないじゃない、みたいなことになる。

けれども 30 代をすぎて 40 歳ぐらいになった時に、もっと若い人の方がいいよねと突然クビになってしまったり、景気が悪くなったり、そういう時に高卒資格がないというのは厳しいものがあります。その子の自信をつける意味でも、その子のレベルに合った学習だったり生活に寄り添ってもらいながら、なんとかその子を高校卒業させるまでは、学校も大変だと思うんですが頑張ってほしいのが私の思いです。答えになっていますでしょうか？

質問者 B：バッシングについてなんですけれども、バッシングをする側はどんなことなのかお話をお聞かせ願いたい。

西田：一つは高齢な方が割と多いんです。高齢というか 50 代以上ですよね。頑張れば何とかなった時代だったりあるいは正社員に割となりやすい、高卒だったり中卒、高校中退でも、一所懸命頑張っていれば正社員になれるといったそういう自分の実体験だったりをもつ方です。最初お話したように私もひとり親世帯で自分もやれたんだからやれないはずがないという人が割と強行に言うことが多いかなと思います。

あとは、それと繋がるかもしれないですが、自分もぎりぎりの生活で頑張っている人でしょうか。特に生活保護についてのバッシングをする人たちというのは、最低賃金でかなり頑張っている人たちの層が多いように思います。昨年 12 月に生活保護基準の切り下げが議論された時があったんですけれども、その時にネット上にあふれたバッシングが、「切り下げられたぐらいで文句を言うな、自分達は最低賃金でギリギリ頑張っているんだからやれないはずがない」というものでした。あとは年金も、「自分たちはこんな少ない年金でやりくりしているのに、生活保護を受けている人の方が多くもらっているじゃないか」みたいな分断がされることがすごく多いなと思います。ただ、生活保護バッシングの期間が長かったので、貧困状態にある人を支援する側もちょっと学習しているところがあって、最低賃金を 1500 円に上げようという若者グループが生活保護基準切り下げ反対の集会に参加してくれました。そこはいがみ合うとこではなくて、どっちも上げていかなきゃいけないという話をしたりとか、建設的な方向にもっていこうという動きもあります。

司会：ぎりぎりで頑張って生活している人は、同程度の生活水準にある人への支援の必要が語られ

ると、自分の頑張りが否定された気持ちになるのかも知れません。問題を分断しないことが大切だと感じました。

質問者Ｃ：ありがとうございました。さじ加減を悩みながら取材されているということで西田さんが当事者の立場になってそこで取材されているということが非常に関心を持ちました。子どもの貧困は家族を支援するというのが大変だということですが、具体的にどういうイメージをお持ちなのか、どんな形で誰か専門の、ケースワーカーは行政の人間だから当てにならないと思うんですけれど、どういうようなことがイメージとして考えられますか？

西田：一つはお母さんに、簡単なんですけど、寄り添ってあげるというか、責めないという事が非常にできそうでできない。今、生活保護ケースワーカーのお話があったんですけれども、私はケースワーカーさんとお会いする中でも非常に良いケースワーカーさんとたくさんお会いしていて、お母さんにきちんと寄り添ってあげていました。お母さんも自分の生育歴からそういうことになってしまっているのを仕方がない、しんどいんだよねときちんと受け止めてあげるということによって、お母さんは少し楽になれます。お母さんも自分が悪いのは自分の心の中で分かっています。そのイライラが子どもに向かったりとかそれが虐待、ネグレクトになったり、子どもには悪い方向にいくので、まずお母さんを受け止めてあげることと、そのなかでお母さんがもっている困りごと、「実はお金の面というよりはこういうことに困っていて、本当は就職したいんだけどどうしていいか分からないんだ」とか、そういうお話をきちんとお母さんができるようになるまで。ケースワーカーさんにとって大事なところだと思うんですけれども、就労支援に強制するんじゃなくて、一緒に励まし合いながら向かわせていってきちんと自立するように支援していったり、あとお母さんに精神疾患がある方だと適切な機関につなぐことによって子どもに向かったりしないようにするとか、かなりできることがあるかなと思います。前提としては、お母さんを否定しない、無理に働かせるとかそういうことではない。きちんとされている自治体とか団体さんだとかは、やはりお母さんの話をよく聞いてあげることをしていますね。

あとは、「こどもの里」で取材をしたときに、家族会議にスタッフが参加するというかなり珍しいことがありました。お母さん自体に、問題を自分の中で整理する力が弱く、スタッフが入ってこういう問題を解決しなければいけないねと一緒に話し合うとか、そういうお母さんの生活上の困りごとを整理するイメージです。やっぱり子どもはお母さんやお父さんが大好きなので、お母さんやお父さんを否定しないことがとても大切なのかなと思います。

と言いながらも、それは考え方のところです。一番欠かせないことはやっぱり、最低限は生活保護などきちんと経済的な部分で世帯を支えることだと思っているので、生活保護につながった後という前提で話をしました。日本では、生活保護を本来受けられるにも関わらず受けている人の割合は２割程度、非常に低いので、きちんと生活保護につないでお金の部分で支えるというのが大前提、基本かなと思います。

司会：世論が分かれるような記事を、西田さんは自分の立場を鮮明にして書くというスタイルだと思います。実際の記事になるまでは、社内でもかなり議論があると思うのですが、そこはどう切り抜けてこられたのですか。

西田：なかなかお話するのにきっかけをつかめずにいたのを、先生が振ってくださったと思うんですけれど、実は今日皆さんにせっかくお話を聞いていただきながら、今日（５月 31 日）付けで私は会社を退社することになっています。退社後は、子ども支援の現場に入ろうと考えています。

そのことと、先生が質問されたことは関係があ

るかなと思います。新聞記事もたくさんのページがある中で、何を大きく扱うか何を小さく扱うかは判断する役割の人がいて、「これは世の中の人が知りたいだろうか」ということに基づいて決めるんですよね。会社や上司がどうこうということではなくて、その基準が、私が現場にいることが長くなるにつれ見えてきたところと違ってきたように思いました。

バッシングだったり自己責任論だったり、どうしてもそういうことが起こる生活保護基準の引き下げとかを取り上げたところで、「その人たちは別に特に困らないはずなのに（もちろん実際そうではないんですけれども）、どうしてこんなことを記事に載せる意味があるの」と読者の皆さんがたくさん思う状況だと、これを読むべきだと押しつけることはできない。というのも、今はネットがある中でどれだけ今記事が読まれたか、そういったことも考えていかなきゃいかないです。

世の中のさじ加減が、新聞の記事の大きさとか新聞の記事の選ばれ方とかにどうしても反映しているところがあります。今日のお話で子どもの貧困ではなくて親の貧困なんだよという話を、とてもしてきたんですが、子どもの貧困の方が記事に載りやすいのが現実問題としてあります。やっぱり自己責任論の枠外というのと、子ども食堂など子どもの貧困を何とかしてあげたいと思っている方はすごくたくさんいます。ですので、そこは提案すると割と載りやすかったりするんですけれども、生活保護の大人世代の話だったり、生活保護ケースワーカーさんの話だったりは難しい。すごく読んでいただければ深く知ってもらえるけれど、実際は難しいということになるとそれを載せる意味があるのかという戦いのなかで、何とかかんとかして載った僅かな記事が今日ご紹介した記事という現実もあります。

ちょっとネガティブな話をしてしまったんですけれども、私の自己責任論みたいな考え方を変えていただいたのは取材という機会があったからです。その時現場を見せて下さった方がいたからであり、私が少し変わったことによって、その変わったことを伝えることで少しでも同じように変わる人がいればいいなと思って書いてきました。その熱量で動いた、いい記事があったということです。そんな感じで答えになりますかね。

司会：貧困問題という、ある意味書きにくい記事を何年も追ってこられたというのは何故ですか？

西田：一つはやっぱり私も変えてもらった、自分が現場との出会いで変えてもらったので、書くことによって少しでも社会や読んだ人が変わるんじゃないかという気持ちがありました。

「アスポート」という最初に紹介した学習支援事業を高校まで拡大させようという時に、行政の方がすごく頑張っていました。その前に知事との記者会見のなかで拡大について話題に出した中で、「まさにその通りだ、高校生までやらなきゃいけないんだ」と思って頑張った行政の方がいて、私が記事としてなるべく大きく載るように工夫して載せたりしたことがあって、それが少しは後押しになって、高校生向けの事業も始まりました。記者という仕事は「拡声器」だと私は思っています。ゼロのことを発信することはできないんですけれども、現場で民間団体だったり当事者の方だったり行政だったり、やってる方が「１」の声を出していることについて、私たちが少しお手伝いをして「10」にすることはできる。社会の動きを大きくすることができるのが記者かなと思っています。是非この「１」の声を「10」にしたいと思うような現場に、たくさん毎回毎回出会って来たということで、「これは 10 にしなければ、書かなければ」という気持ちになって動かされたことが一番ですね。

あとは、これはあまり良いことではないのですが、貧困問題に関心を持ってずっとやっている記者が限られていて、私の稚拙な記事だとしても私が書かなくなったらこの問題は載らなくなるんじゃないだろうかみたいな怖さみたいなものがあって、書かなきゃいけないんじゃないかというふうに思っていました。

司会：そんな風に思っておられる書き手がいなくなるのは、正直もったいないなと感じているのですが、これからどうされるのですか。

西田：こうやって沢山、会社も本当にいい会社で長く一つのことをやらせていただいたんですけれども、とは言っても他の仕事もしなければいけない。そのなかで、もっと長いスパンで深く人と関わっていきたいなという気持ちが自分の中で強くなりました。やっぱり子どもの変化って些細な変化で、ご紹介した記事とかは見出しがついていますし、他の記事も「こんな変化があって」という内容を書いているんですけれども、子どもの生活の本当に変化って見出しにもならない、些細なものです。箸を持てなかった子が箸を持てるようになったねといったことは、すごくその子にとっては頑張ったことですごい変化。同時に、なぜそれができたのかって本人も分からないし、支援していた方も分からないし、ある時起こった偶然の喜ばしい瞬間なんです。けれども、そういう小さなことを記事にするのは難しいと思い、そういう小さなことを見続けられる立場にいたいなと思うような気持が強くなっていきました。

司会：別のメディアで書き続けて欲しいなと個人的には思っています。

西田：今日はありがとうございました。私は毎日新聞に 10 年在籍していました。2008 年に入社して 10 年いたんですけれども、その最後の日がここでのお話というのがすごく感慨深く思っています。子どもの貧困の問題というのは皆さんニュースとかで目にされることが多くて、年代も皆さん多分近いので何とかしたいとか、何か力になりたいなと思っていらっしゃる方は沢山いらっしゃると思います。是非是非子どもとしっかり長く付き合うというか、例えば学習支援とかでもいいと思うんですけれども、お話をしっかりする機会があればと思います。しっかり一人のお子さんでも向き合えば、子どもがどういうことを考えているのかとか、親御さんに対してどういう思いを持っているのかとかそういうことも、見えてくると思います。

そうすると貧困問題とか貧困報道とか、「貧困」という言葉や数字、何万円で暮らしているとかいうことだけじゃないんじゃないかなということに想像が広がってくると思うので、そういう経験をしていただいたら嬉しいです。折角の大学生活という少し時間がある時なので。もしそういう時間が持てないとしても、色んな想像をして「この人にこういう背景があるのかもしれない」とか「こういうことが実はあるのかもしれない」とかちょっと想像力を広げて見ていただけると嬉しいなと思います。今日は本当にありがとうございました。

本稿は、2018 年 5 月 31 日に持たれた教育学部講義「子ども・家族福祉論」における講演を文字化した記録に、講師の西田氏が修正、加筆したものである。ご多忙にも関わらずご講演頂き、修正、加筆作業にお時間を割いて頂いた西田真季子氏に感謝申し上げる（担当　松本伊智朗　鳥山まどか）。

（元毎日新聞生活報道部記者）